

2023 年度 事業報告書

はじめに

1) CHARM20 周年記念事業	1
2) 外国語電話相談	5
3) HIV 陽性者の個別支援	7
4) グループプログラム	10
5) 多言語支援	12
6) 関西学院大学留学生支援事業	19
7) ネットワーク	19
8) 広報	20
9) 実習・研修受け入れ	22
10) 理事会	23
11) 会員総会	24
12) 事務局	24
13) 会員	25
14) 寄付者名一覧	25

決算報告



特定非営利活動法人 **CHARM**
(Center for Health And Rights of Migrants)

はじめに

共感できる社会に向けた CHARM の役割

CHARM は 2002 年に大阪で活動を始めました。22 年の間、大阪府、大阪市を始めとした自治体や厚生労働省そして HIV 診療を行うエイズ拠点病院を中心とした医療機関と協働する機会を与えられ、連携を築いてきました。

CHARM の利用者の多くが言うことは、エイズ拠点病院では問題ないことも、それ以外の医療機関や職場では認識が全く違うということです。日本に暮らす外国人の健康を保障する制度も一向に整備されないどころか最近が悪くなっています。日本に暮らす人は生活の快適化に伴って他の人を理解して共感する力が弱くなっていないでしょうか。

半世紀以上前の日本を振り返ってみると、人と人がもっと近くにいました。

私が小学生の頃、母に言われてたびたびお隣のゆみちゃんの家食材を借りに行きました。家がない時に借りて次に買った時に返すのです。次第に家の近くでも物が買えるようになり、借りる必要は無くなりました。その反面、ちょっと足りない、ちょっとしんどいということも言えなくなりました。自己完結することが当然とされ、人の痛みや気持ちを感じる機会が少なくなりました。

CHARM は、より多くの市民が自分とは関係ないと思っている人たちに「共感」できる力を養う場となることが役割の一つであると思います。出会い、実感し、共感する人が増えることによって偏見や排除の気持ちが変わります。共感できる社会に向けて。

青木理恵子(事務局長)



● 2023 年度 CHARM 事業報告書

1) CHARM 設立 20 周年記念事業

1-1) 設立記念パーティー(ホームカミング)

2023 年 9 月 30 日(土)13:30-16:00 開催。 会場：Bazaar Café（京都市）

現地参加 50 名、オンライン(海外から)4 名、合計 54 名



京都バザールカフェにてなごやかな雰囲気の中、久々の再会や初めて会うメンバーも多く、最初は誕生日ごとにグループに分かれ、揚げ春巻き、キンパ、ヤンニョンチキン等のバザールカフェのおいしいエスニック料理を食べながら、自己紹介をした。

次に、現在海外在住(オーストラリア(松岡さん)、アメリカ(Ayaka さん)、ドイツ(ニコールさん)、インド(岡部さん))の元事務局やボランティアスタッフがオンライン(zoom)で参加し、それぞれが CHARM との関わりや当時の思い、そして近況報告があつて、遠く離れても CHARM の活動に関わってもらっているように感じる。



その後、20 年の振り返りと現在の CHARM 活動の紹介があつた。現在の活動報告では医療通訳(庵原)、そよかぜ・つむぐ(三田)、留学生支援事業(竹野)から発表があつた。

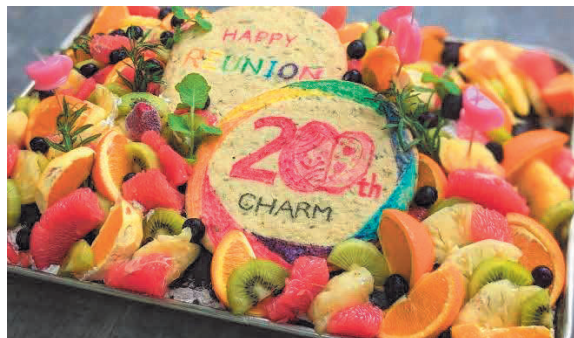
医療通訳では医療通訳者の位置づけや期待されていること、CHARM が行っている通訳の種類の紹介、医療通訳を使うことによって患者が安心して医療が受けられ、早期治療、早期回復、そして費用を抑えられるというメリット、医療機関にとっても患者が制度を理解できることで、制度活用ができ、未払いが予防できることができる。また、通訳派遣の実績やその変化についての紹介があつた。



陽性者支援事業では介護保険などの公的支援が適応しない支援を提供している「そよかぜ」の紹介があった。この事業は病院同行、入退院の支援、散歩や買い物等への同行なども行っている。そして、そよかぜの中での活動「つむぐ」の集いの紹介もあった。

留学生支援事業については担当の竹野から報告があった。2023年4月からスタートした新しい事業で、関西学院大学から委託を受けたものである。この事業は、改正障害者差別解消法(2024年4月施行)において、障害のある人から申し出があった場合、「合理的配慮の提供」が求められるとのことで、母国で医療や支援を受けている留学生が、日本で医療機関に繋がり、安定して医療が受けられるまでの同行、通訳の支援を行うものである。この事業はこれまでのCHARMが行ってきた事業とは異なるものの、外国籍住民に対して健康面のサポートを続けて来た実績が実ったものである。CHARMの次の20年において、新たな活動分野の最初の一步になる。

途中、バザールカフェ特製のフルーツたっぷりの上に20周年記念ロゴの入ったケーキのサプライズもあり、とても盛り上がった。



最後に松浦理事長から自分の歩みとHIV感染症の歴史の話があった。

※HIV感染症の歴史と松浦理事長の歩みについて、理事長自身が執筆した「私とHIV」(全4回)は Charming Times No.22-No.25 でご覧になれます。 www.charmjapan.com/charmingtimes/

1-2) 国内フォーラム

「海外から移住するHIV陽性者の現実(リアル)」

2024年2月24日(土)14:00-16:30 開催 会場：日本キリスト教団東梅田教会

現地参加 31名、オンライン 22名、合計 53名

日本で生活し働く海外出身のHIV陽性者の生の声を聞き、医療につながる際の壁や課題について意見交換を行った。

プログラムでは、最初に大阪市立総合医療センターソーシャルワーカーの瀧浦その子さんが「海外から移住した人が日本でHIV診療を受けるための手順と条件」というテーマで発表した。日本人ならほとんどの人が加入している健康保険が、外国籍住民は加入のため在留資格の条件があること、未加入の場合、病院から2倍3倍の費用を請求される可能性があること、また途中から日本の医療の枠に入るので福祉にアクセスするための書類が母国から入

手できない場合があることなどを現場の声として発表した。

CHARM20周年記念事業国内フォーラム

海外から移住する HIV 陽性者の 現実

日時：2024 年 2 月 24 日(土)14:00~16:30
会場：日本キリスト教団東胎田教会
大阪府北摂野南町 9 丁目 6 番
<https://nigashiumeda-church.jp/access>

※お申し込みは事前申し込みが必要です。
定員：参加費 50 名、キャンセル 50 名
申し込み締め切り：2/20(日) 午後 5 時まで

HIV 感染は、薬を毎日飲み続けることでウイルスを抑えることができて病状となりません。早期に治療を始めることで他の人への感染も起こらないことが国際的に共通認識となっています。どこにいても薬をみ続けることが重要です。国境を越える人々も移住した先でスムーズに医療につながらず、薬を続けることで健康な生活を送ることができません。日本の現実はどうでしょうか？移住者の経験をを通して日本の HIV 体制の課題を考えます。

I. 海外から移住した人が日本で HIV 診療を受けるための手順と条件
（配布資料「大阪府立総合医療センターソーシャルワーカー」）

II. 経験者のリアル
a) 多岐にわたる国の HIV 状況が異なるながらも民間 HIV 診療を受けることができた人（アフリカン）
b) 日本の福祉や医療制度に「アフリカン」がいたため医療福祉を受けることができなかったアフリカン・プリンセスさん

III. 医療者・支援者から見たリアル
海外から移住した人（アフリカン）に「日本 HIV 医療」
2023 年 1 月から 2023 年 6 月までの港町診療所、ぷれいす東京、CHARM に寄せられた海外からの転入者の相談記録から、日本の医療や福祉につながった人、つながらなかった人の実態を報告する。
（次郎 健太（港町診療所 医師））

IV. 隣の国々のリアル
アジアの国の外国人 HIV 陽性者受け入れ状況、川原 典典（CHARM 理事）

V. 質疑応答と意見交換
VI. お茶と軽食の交流会

主催：港町診療所・ぷれいす東京・CHARM
Tel/Fax:03-6334-5557
<https://www.charmjapan.com>

協力：MASH 大阪
<https://www.mash-osaka.com>

CHARM20th Anniversary Forum

Realities People living with HIV (PLWH) face after migrating to Japan

Date&Time: February 24th (Sat.) 14:00-16:30
Venue: UCC HigashiUmeda Church 15 minutes from JR Osaka station
<https://nigashiumeda-church.jp/access>

Admission: Free
Please register by email: forum20@charm-japan.com

HIV is controllable by taking medication everyday. PLWH continue to live and medical treatment prevents from infecting others is widely known around the world. Thus, it is important to continue taking medication daily. System to support PLWH across borders is imperative. We will hear about the realities from two PLWHs who migrated to Japan.

I. Steps migrants will go take for accessing HIV treatment
Sendou Tsukuru (Social Worker, Osaka City General Hospital)

II. Realities of HIV treatment access experienced by migrant PLWHs
a) Unstable work condition that hinders medical service access. Risk
b) Japanese welfare system is not applicable because she cannot present past results. It is far from global standard. African Princess

III. Realities seen by supporters at a clinic and NGO
Cases of migrant PLWH handled by Minatomachi Clinic, Place Tokyo and CHARM during and after COVID-19 between January 2020 to June 2023 will be presented to show overall picture of migrant PLWH situation in Japan.
Takashi Sawada (MD (Minatomachi clinic))

IV. Realities in neighboring countries
Report on migrant PLWH treatment access in 6 Asian countries
Naoko Kinoshita (CHARM board member)

V. Questions and Discussion
VI. Tea and sharing

Organized by:
Center for Health and Rights of Migrants (CHARM)
Tel/Fax:03-6334-5500
<https://www.charmjapan.com>

Cooperation:
MASH OSAKA
<https://www.mash-osaka.com>

次に、当事者 2 名から日本で経験した医療アクセスの課題を共有した。1 人目のリコさんは日本で HIV 陽性が判明した。しかし、仕事の契約が切れ、転職し、他の町に引っ越したため継続して病院に通うことができなかった。転職後すぐは平日に仕事を休むことができず、また陽性判明後に受診した病院で「医療費が毎月 2 万円かかる」と言われたと思い込み、そんな金額は払うことができないので受診へのモチベーションが上がらなかった。インターネットで見つけた「感染したら 10 年しか生きられない」という記事を見て自暴自棄にもなっていた。しかし、数ヶ月後には自分の仕送りで生活している母国の家族のことや、日本に仕事に来たくても来られない人がいるということを思い、治療を受けようと考えようになった。そして、陽性がわかったときと同じように地域の無料検査場へ行って検査を受け、再度病院に繋がることになった。2 人目のアフリカン・プリンセスさんは、来日前から母国で治療をしていた。母国では HIV は普通の疾患の一つとして扱われているため、過去の検査データ等は残っており、日本の身体障害者手帳が申請できなかった。そのためオンライン薬局で薬を購入していた。風邪や婦人科の病気など直接 HIV に関係しない病気で一般医療機関を受診した際に、HIV を伝えたと診療してもらえなかったことが辛かったと語った。また、オンライン薬局で購入できる薬の量の上限は 1 か月のため COVID-19 のような感染症の流行や自然災害によって流通が滞ると薬が入手できなくなり非常に不安定という現状を説明した。

続いて、港町診療所の沢田貴志さんが「海外から移住してきた人がつながりにくい日本の HIV 医療」というテーマで発表した。2020 年 1 月から 2023 年 6 月までの港町診療所、ぷれいす東京、CHARM に寄せられた海外からの転入者の相談記録から、日本の医療機関につながった人、福祉制度につながった人などの実態、課題を発表した。調査対象者(87 名)の在留資格のほとんどは就労、留学だったが日本人の配偶者や海外で治療を開始した日本人もいた。



87 名の内 82 名は健康保険に加入することが出来る状況にも関わらず 13 名が自立支援医療に繋がることができなかった。その理由として①在留資格と健康保険の壁(3 か月未満の在留資格しか出ず健康保険に加入できない)②CD4 データの壁(治療前の CD4 のデータが無い、CD4 が 500 以下を下回ったことが無い)③言語の壁(守秘不安で手続きしない)が挙げられた。日本には約 300 万人の外国籍住民がおり、日本経済を維持していくためには彼らの労働力が不可欠である。しかし、外国籍住民、特に HIV 陽性者にとって日本の医療に繋がるということは制度的な難しさがある上、多言語支援が整えられていない現状ではプライバシーが守られない可能性もある。外国籍住民の医療アクセスの確保は日本の公衆衛生の責務であり、多様性のある社会こそが本当の豊かさに繋がるのではないかと問題提起をした。

最後に、2022 年に実施した国際フォーラムよりアジア 6 か国の HIV 診療の比較と 2023 年 7 月から 12 月の間に CHARM が受けた相談事例を竹野からまとめて報告した(国際フォーラムの詳細は CHARM ホームページを参照。www.charmjapan.com/anni20th/)。2023 年 7 月以降 CHARM で受けた相談も沢田さんの報告内容と傾向はほぼ同じだが、自立支援医療に繋がらなかった人は 9 名中 4 名と大きな割合を占めた。海外の診療事情と比較すると日本の自立支援医療は異質で、HIV が慢性疾患になり移民の受け入れを盛んに行っている今、制度の改正が必要である。

今回の国内フォーラムで一旦 CHARM 設立 20 周年の記念事業は終了するが、次の 20 年への課題が明らかになった 2 年間だった。これからもそれぞれの垣根を越えて、すべての人が健康に暮らせる社会を実現するための取り組みを行いたい。

1-3) 20 周年記念募金 趣意書の作成、募金実施、金額

20 周年記念「つなぐ・まもる・つむぐ」募金

募集期間 2022 年 6 月 1 日～2023 年 12 月 31 日

募金の趣旨は、CHARM がこれまで行ってきた国内外の団体との連携(つなぐ)をさらに強化し、HIV 陽性者や外国人の健康と権利を守るための活動を前に進め(まもる)、人々が出会い、関わり、共同する(つむぐ)機会を創り出す取り組みを大胆に進めるための経費を多くの方々に支援していただくことを目的とした。

実施募集期間 2022 年 6 月 1 日から 2023 年 12 月 31 日までの 1 年半の間で目標額 200 万円に対して 2022 年度は 729,000 円、2023 年度は 675,00 円、合計 1,404,000 円であった。2023 年度の寄付者のお名前は、以下 14)に掲載している。

一般寄付と合わせて、20 年の歴史の中で最も多くの支援を受けることができた。募金により 20 周年記念事業として実施した国際フォーラム、国内フォーラム、記念パーティーを開催、またホームページリニューアルや記念グッズを作成し、多くの方に CHARM を知っていただくツールを作ることができた。



2) 外国語電話相談

活動開始年：2002 年
目的：日本語以外の言葉話す人たちが理解できる言語で HIV、他の性感染症についての相談、検査や診療に関する情報を得る機会を提供するために 5 言語で電話による相談を行っている。
頻度：毎週火曜日 スペイン語、ポルトガル語、英語、16:00-20:00 水曜日 中国語 16:00-20:00 木曜日 英語 16:00-20:00
委託元：大阪府、大阪市

2023 年度は 137 件の電話相談を受けた(2022 年度は 131 件)。

言語別相談数は英語が 51 件、ポルトガル語が 31 件、日本語(外国人)22 件、中国語 15 件、本人に代わって連絡してこられた支援団体や代理の方が 7 件、スペイン語 4 件、日本語(ネイティブ)と医療機関が各 3 件、タイ語 1 件であった。

言語の特徴として、1 番多い英語と 2 番目に多いポルトガル語の相談が前年度より多く増加した(英語+15 件、ポルトガル語+14 件)。反対に中国語とスペイン語の相談が減少した(中国語-7 件、スペイン語-12 件)。ネイティブではない日本語を話す外国人からの相談は昨年度同様 3 番目に多く、CHARM が電話相談で対応していない言語からの相談の需要がこれまで同様にあることが明らかである。

2023 年度 対応言語及び件数

月 言語	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	年間 合計
英語	2	5	8	5	5	3	0	3	1	6	6	7	51
ポルトガル語	3	0	3	0	5	3	3	1	4	1	2	6	31
日本語(非ネイティブ)	0	3	1	1	2	3	2	1	2	1	4	2	22
中国語	0	2	3	0	2	2	1	3	1	0	1	0	15
支援団体/代理	0	0	2	0	0	1	1	0	1	2	0	0	7
スペイン語	0	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	0	4
日本語(ネイティブ)	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	3
医療機関	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	3
タイ語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
合計	6	10	17	6	16	14	9	10	9	10	15	15	137

相談内容について、件数が多い順として「外国語の通じる抗体検査会場紹介」が **43** 件(2022 年度 29 件)、「HIV に関する情報」**34** 件(同 24 件)、「陽性者の社会福祉制度、医療費、薬価」**22** 件(同 14 件)、「外国語の通じる医療機関の紹介」**21** 件(同 15 件)、「行政手続きの方法」18 件(同 23 件)、「陽性者の不安、心理的問題」**18** 件(同 7 件)、「医療機関紹介」18 件(同 16 件)だった。

HIV 抗体検査会場の紹介や HIV に関する情報を求められる「感染不安の方」から、陽性者の社会福祉制度や医療機関の紹介や陽性者の不安や心理的問題などの「HIV 陽性者支援」まで、CHARM が対応する範囲は広く、一度の電話相談で完結できないような相談も含まれており、電話相談の相談員と外国人陽性者支援担当者の連携が欠かせないため、来年度以降、連携強化をしていきたい。

2023 年度 相談内容(複数回答あり)

月 内容	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	年間 合計
外国語の通じる抗体検査会場紹介	1	5	7	4	2	3	2	2	2	5	4	6	43
外国語の通じる医療機関の紹介	1	0	4	1	3	5	2	0	2	0	0	3	21
行政手続の方法	2	1	3	0	1	3	3	1	0	0	1	3	18
性感染症、婦人科系の問題	0	1	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	5
HIV に関する情報	0	2	2	1	3	6	1	4	1	2	6	6	34
陽性者の症状、薬の副作用	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
陽性者の社会福祉制度、医療費、薬価	1	1	0	0	2	0	3	2	3	3	4	3	22
陽性者の不安、心理的問題	2	0	1	0	5	2	1	1	2	0	3	1	18
海外の HIV 診療事情、受入れ機関紹介	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	4
陽性者 その他	3	1	2	0	2	0	1	0	1	0	1	3	14
医療機関紹介	2	3	2	1	1	2	2	1	2	1	0	1	18
NGO/NPO 紹介	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	1	2	7
HIV を含む性感染症への不安	0	0	1	0	4	0	0	1	1	1	2	2	12
陽性者の家族、パートナー等	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
その他	0	1	1	0	2	5	1	2	0	1	1	0	14
合計	14	15	23	7	26	30	18	17	14	13	27	30	234

・LINE による相談(英語)の試験的な実施

外国語電話相談の他に、LINE による相談(英語)を 2023 年 9 月から試験的に開始した。

近年、来日する外国人のほとんどはスマートフォンを所持し、インターネットを利用して LINE などの SNS を使い、家族や仲間と連絡を取っているため、日本の電話番号を契約せず、固定電話や携帯電話に電話をかけることができない人が多くなっている。来日外国人の状況に対応するため、新しい相談ルートとして LINE による相談を開始した。2023 年度は英語のみの対応。ホームページなどで広報活動や QR コードを利用し LINE につながる工夫を行った。



2023 年度には 13 件の相談があった。相談内容は「HIV 陽性者の治療や社会福祉制度」が 7 件、「性感染症への不安、STI 検査」が 5 件、その他が 1 件だった。

アクセス元は日本からが 8 件、海外からが 5 件だった。

対応について、情報提供が 9 件、継続対応が 4 件であった。

2024 年度も引き続き英語による LINE 相談を継続し、LINE による相談の必要性を確認する。

3) HIV 陽性者の個別支援

3-1) 移住 HIV 陽性者支援

海外から日本に移住する予定、または既に日本で生活をしている HIV 陽性者からの今年度の相談件数は 101 件であった。内訳は①日本での HIV 治療の継続に関するものが 71 件、②治療以外の日本での生活に関するものが 22 件、③日本以外の国における HIV 診療事情に関するものが 6 件だった。

① 日本での HIV 治療に関する相談

相談者 71 名の内、日本の拠点病院に繋がるための支援を行ったのは 15 名で、その内身体障害者手帳の取得や自立支援医療の申請に繋がった人は 9 名に留まり、残りの 6 名は身体障害者手帳を申請するために必要な過去の低い免疫を示す検査結果が無かった。その 6 名の日本での治療継続方法の内訳は、高額療養費制度を利用して日本の病院で医療を受ける人が 2 名、オンライン薬局で薬を購入し定期的に日本の病院でフォローアップの検査を受ける人が 2 名、自国から薬を送り続けてもらう人が 2 名だった。自国から薬を送り続けてもらう人の内 1 名は、日本で長く生活するつमोरのため一旦治療を中断してでも身体障害者手帳を申請するつもりでいたが、拠点病院との話し合いで母国から薬を送り続けてもらうことになった。しかし、いつまでも送ってもらえるという約束は無く、いつか母国の病院の方針が変わってしまえば薬を入手できなくなるかもしれないという不安定さの上で日本での生活を送っている。

これらの相談者のほとんどは CHARM のホームページを通して繋がったため連携した医療機関は関西圏に留まらず、北海道、東京都、山梨県、長野県、新潟県、愛知県、愛媛県と全国に渡った。日本の拠点病院に繋がるための支援を行った外国籍 HIV 陽性者の国籍は中国、フィリピン、ミャンマー、インド、オーストラリア、デンマーク、ハンガリー、ウクライナとこちらも多岐に渡った。

② 治療以外の日本での生活に関する相談

相談内容の詳細は、在留資格の更新について、健康保険の切り替え手続きについて、帰化について、難民申請について、出産・育児について、児童扶養手当の申請について、障害年金の申請について、日本国内での引越し後の手続きについて、日本語で書かれた書類の内容について等であった。これらの相談内容からも、外国籍 HIV 陽性者が一市民として日本社会の中で生活を営んでいることがわかる。日本語の理解が十分でない外国籍住民は、周囲に自分の HIV 感染が明らかになってしまわないかととても気を張っており、CHARM のような継続して陽性者と関わる相談窓口は必要な役割を担っていると考えられる。中には行政や保険者からの書類を会社に翻訳依頼する前に HIV について書かれているかどうかを CHARM に確認する陽性者もいた。

③ 日本以外の国における HIV 診療事情に関する相談

6 件の相談の内当事者からの相談が 4 件、医療機関からの相談が 2 件だった。昨年度実施した移住と HIV アジアフォーラムの参加国についての情報提供依頼もあり、スムーズに連携することが出来た。

3-2) 日本に居住する HIV 陽性者の個別支援

HIV 陽性者の個別のニードは多様化している。一般のサービスに紹介することができないものについて CHARM が対応した。一つは、薬物依存症から服役することになった受刑者の支援である。2023 年度は、2 人を支援し、裁判傍聴 1 件、留置所、拘置所面会 5 件、自宅退去に伴う支援 6 件、服役中の文通が 12 回であった。この活動はグループ活動 SPICA の延長である。もう一つは、HIV 陽性者が入院した際に愛犬を初めて預かった。CHARM 事務所での対面カウンセリングを定期的に利用した人が 5 名、電話でのカウンセリングを利用した人が 2 名あり内 1 名は外国人であった。

3-3) HIV 陽性者の同行/訪問支援「そよかぜ」

活動開始年：2015 年

活動内容：エイズ拠点病院や訪問看護ステーションと共同して独居患者が自立出来るように経過訪問支援などを行なう。介護保険などの公的支援が適応しない支援を提供している。家族が通常行うことを期待されている病院同行、入退院の支援、散歩や買い物等への同行、などである。日常的に必要なとする場面で支援を提供することを長期的に行うことを通して信頼関係を築き、いざとなった時に頼ってもらえる存在となることを目指す。

メンバー：看護師 1 名、保健師 1 名、ボランティア 1 名で活動している。計 3 名

活動頻度：必要に応じて随時

会議開催頻度：毎月 第 2 火曜日 13:00-14:00

対面会議：毎月実施

そよかぜ支援者の活動内容は、一人で受診することができない単身の方の病院受診同行や話し相手が主な活動支援に移行している。地域支援との共同に関しては、病院のソーシャルワーカーや訪問ステーション担当看護師、ケアマネジャーと電話にて情報を共有しながら現状を話し合い、個々に合う支援の方法を考えている。酸素ボンベを持参しながら診察している方を訪問医療に移行するための病院への働きかけ、受診診察科をまとめて同日にすることの提案、など本人の負担を軽減し少しでも QOL が高められるような方向へと、病院と協同支援を行った。また、中には訪問ではなく電話でつながる希望の方もあり、定期的に電話による連絡を継続している。

話し相手の内容は、高齢や独居の身近に頼れる人がいない現状から起こる孤立を防ぎ、繋がりを継続していくことで、不安から安心へと変えることの大切さを感じている。グループ内の情報の共有はコロナ禍後、対面による会議を毎月行い、情報を共有しながら問題解決に向けた意見交換を行った。

2024 年度の訪問目標は引き続き「繋がり」をキーワードとして、支援者の個々に合った支援方法を考え、訪問看護ステーションや地域との繋がりも持ちながら、公では出来ない家族的支援活動を行っていきたい。

3-4) HIV 総合相談窓口 SO SO SO (HIV 陽性者のためのメール相談)

活動開始年：2021 年 10 月開始 HIV 総合相談窓口“SO SO SO”

活動内容：HIV 陽性者の方やパートナー、家族などのための無料メール相談

目的：

- 1) HIV で情報を得たい人や相談したい人が、時間に関係なくメールで相談することができ、問題解決に向けた一歩を進める一助とする。
- 2) CHARM で活動している専門家も含めた人々にその能力と才能をボランティアで発揮してもらい相談者のニーズに近い対応をチームで行う。

開催頻度：必要に応じて随時

登録プロボノ：医師、薬剤師、臨床心理士、ソーシャルワーカー、看護師、陽性者の方など

委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談、支援一式

陽性者への総合相談窓口“SOSOSO”に入った相談件数は、2022 年度新規 12 件、2023 年度は新規 21 件、継続 25 件であった。件数は 9 件増えた。

メールのやり取り回数は多い方で新規者 4 回、継続者 6 回であった。

相談内容はコーディネーターがメールのやり取りで寄り添いながら相談者の気持ちの整理を行い、問題点を明らかにし、専門の担当者へ繋ぐことができた。相談の内容により個々が少し前に進める気持ちをつくることに努めた。また、気持ちが落ち着くまでメールでのやり取りを行った。そして、安心できたなどの返事も寄せられた。

相談内容の中には、長期に渡る継続内服が HIV を思い出してしまい、内服を拒否したいという夫を妻が心配し

た相談内容、また HIV/AIDS のために再就職ができないのではないか、自分の HIV 感染の情報が漏れるのではないかという不安、海外赴任の際に病名を上司に告知するべきかの相談、HIV への感染疑いの不安、HIV の内服薬情報を知りたい、妊娠検査時にスクリーニング検査時に陽性と出た、ワーキングホリデーで海外に渡航する HIV 陽性者の渡航先での HIV 診療に関する情報提供など多岐に渡った。内服継続を出来ない夫は診察を拒否していたが、状態が悪化する前に妻と共に診察を受けることが出来た。また、再就職の相談は障害者手帳を見せると HIV/AIDS とわかり就職できないと不安を訴えておられたが、病名ではなく免疫疾患と書かれていることを伝えた。その後就職ができたこと返事が来た。2 月からは外国からの日本入国や海外への出国に伴い、診療情報や薬についての相談が増えている。

相談に関してはその都度、薬剤師、看護師や外国人支援対応者など専門へと繋ぎ解決へ導くことができた。

3-5)エイズ専門相談支援事業 (大阪市)

開始年：2002 年

目的：

- 1) 大阪市内で行なっている HIV 検査後に検査結果が陽性と判明した人にカウンセリングを行い、気持ちを受け止め、必要とする情報を提供することで、不安を軽減しエイズ拠点病院の診療につながることを目的とする。
- 2) 大阪市立病院で通院または入院治療を受けている患者の要望に応じてカウンセリングを行う。
- 3) 中央区、北区の保健福祉センターで月 2 回ずつ HIV 検査時に受検者等に HIV や他の性感染症に関する相談の機会を提供する。

登録カウンセラー：臨床心理士、ソーシャルワーカー、看護師 計 5 名

頻度：必要に応じて随時

委託元：大阪市保健所

2023 年度は、コロナ禍の終息となり、保健センターの採血体制も増員されるなど HIV 検査の受検数は増加傾向である。今までコロナ禍での緊急事態宣言、自粛で検査に行きにくかった現状が変わり、性感染検査の受検へ向いていると考えられる。

今年度、保健福祉センターの陽性告知および定例相談、病院でのカウンセリングの合計件数は、2023 年度は 75 件(2022 年度 82 件)であった。

保健福祉センターでの HIV 陽性告知時のカウンセリング派遣は、2023 年度は 16 件(2022 年度 9 件)と増加した。陽性告知の場面では、パートナーが陽性者なのでいずれ感染すると思っていたので覚悟はできていた。U＝U について、Prep について知りたい、HIV の知識がなく感染に驚いているなどの発言があった。HIV/AIDS に関する新しい知識の啓蒙や若年層に対する性教育の在り方を考慮する時期と考える。

大阪市立総合病院へのエイズ専門相談員の派遣は 20 件であった。相談者の入院などで後半カウンセリング回数が減少している理由については、次年度関係医療機関と協議をして必要な人がカウンセリングにつながるより良い方法を見出したい。

相談員の連絡会議はオンラインでの会議を行った。会議では、告知時の心理社会的支援の基本的な考え方、視点、相談者の具体的ニーズや対応について、それぞれが意見を述べて知識を深めている。また、2023 年度関西 HIV 臨床カンファレンスにおいて、3 月 2 日「独りで暮らす HIV 陽性者が生活の中で必要としていること」という題名で CHARM の支援から見える高齢化独居 HIV 陽性者の現実を発表した。

3-6) 和歌山県エイズカウンセラー派遣事業

活動開始年：2020 年

目的：和歌山県立医科大学付属病院にて、エイズ患者または HIV 感染者およびその家族に対するカウンセリ

ングを行う。

頻度：月 4 回

委託元：和歌山県

2023 年度は月 4 回、計 48 回の派遣を実施し、対応件数は延べ 24 件だった(内 2 件は HIV 陽性者ではない相談対応)。2024 年度も引き続き派遣する予定である。

4) グループプログラム

4-1) 女性陽性者交流会

活動開始年：2007 年

目的：女性 HIV 陽性者が、同性の仲間と出会うことで孤立を防ぎ安心して暮らすことに繋がる機会をつくる。

活動内容：年に一度 1 泊 2 日の多文化キャンプを実施し、女性 HIV 陽性者や医療者に出会う機会を作ってきた。2020 年度からはオンライン形式の女性交流会を開始し、現在も継続している。

開催頻度：多文化キャンプは年に 1 回、オンライン女性交流会は 2 ヶ月に 1 回（曜日、時間は不定）

委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援一式

女性 HIV 陽性者交流会は、女性陽性者同士が出会い、つながるピア(仲間)の場である。

2020 年以降 COVID-19 の影響により、対面のプログラム「多文化キャンプ」を開催することができずにいたが、今年は 4 年振りに 1 泊 2 日の集まりを開催し、全国各地から HIV 陽性女性が参加した。参加者は、女性陽性者 18 名(うち外国籍 5 名、新規参加者 2 名)、子ども 8 名(乳幼児 4 名、小学生 2 名、中学生 2 名)、スタッフ 8 名(医師 2 名、薬剤師 2 名、看護師 2 名、支援者 2 名)であった。同プログラムは、京都 YMCA の協力を得て実施している。子どものケアをするボランティアリーダー 5 名と京都ワイズメンズクラブが夕食を提供した。女性たちは互いに再会を喜び、また新規で参加された方に対しても温かく迎え入れ、各自の経験や生活面の工夫などを共有したり、疑問や心配なことについて意見交換をすることができた。新規で参加した外国籍の方の母国では、まだ HIV 感染症が死の病で自分も長生きは出来ないと思っていたところ、この多文化キャンプには感染後 20-30 年経った今も元気に暮らしている方がいることを知り、生きる希望が持てるようになったと語られた方もいた。他の陽性者の存在が彼女たちの生きる励みになっており、この多文化キャンプを行う大きな意義の一つでもある。



コロナ禍の 2020 年に開始したオンライン交流会は、今年度もおよそ 2 ヶ月に一度、合計 5 回開催した。参加者は延べ人数 34 名で、そのうち外国籍女性 10 名、新規参加者は 2 名(うち外国籍 1 名)であった。内容については、外部講師による講義「痛みのケア」を 1 回実施したほか、近況報告とその場で出たトピックに沿いディスカッション形式で行うものを 4 回実施した。オンライン女性交流会は女性同士の交流を深めるというだけでなく、一泊二日のプログラムへの参加がむずかしい人にとっては他の陽性者と出会い、対話から有益な情報を得ることで疑問や不安を解消し、精神的に孤立する状況を防ぐのに重要な役割を果たしている。一方、家族に告知していないために自

宅でオンラインにアクセスできない、自分だけのプライバシーが守られる場がないなどの理由でオンラインプログラムに参加できない人があることも課題である。

実施回数：多文化キャンプ 1 回～参加人数 18 名、スタッフ 8 名
オンライン交流会 5 回～参加人数 34 名 スタッフ 1 名

4-2) 薬物依存症からの回復を目指す陽性者のピアグループ SPICA

活動開始年：2012 年

活動内容：陽性者で薬物依存症からの回復を目指す人たちが集まる仲間(ピア)のグループミーティング。HIV、セクシュアリティなど互いに理解し合える要素を共通にもつ仲間が、お互いを支え合うためにつながる場として月 2 回の ミーティングがある。

開催頻度：月 2 回 第 2 日曜日、第 4 土曜日 16:00-18:00 に開催。

委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援一式

2023 年度は、24 回実施し、延べ 39 人が参加した。薬物依存症の人たちの状況はその時々で変化する。今年度は、就職したことによりグループミーティングに参加する余裕がなくなった人、再使用したことでグループと連絡を断った人 2 名、再使用により刑罰を受け服役した人 3 名、精神病院に入院した人 1 名、悪性腫瘍によりグループミーティングに参加できなくなった人 1 名、と背景は多様であるがメンバーがお互いに支え合い、励まし合う場であるグループミーティングで参加者が少ないことは致命的である。特に今年度は、設立メンバーが死亡したことによりグループが求心力を失った。次年度にグループミーティングの在り方について検討するため、メンバーは他団体が行っているミーティングを見学し、情報収集を行った。

4-3) Japan Senior Survivors(日本で暮らす外国籍高齢者の会)

活動開始年：2023 年

活動目的：日本人の配偶者や子どものいない外国籍高齢者が安心して日本で老後を迎えられるよう同じ課題を抱える人たちの交流の機会を作る。

活動内容：日本で暮らしている外国籍高齢者が直面している課題や気持ちを共有し、これからも日本で生きていくために有効な情報や知識を得るために勉強会を実施する。

開催頻度：月に 1 回 2 時間

グループを開催することの要望は、HIV 陽性者および陽性者支援活動に従事してきた外国籍者から生まれた。2023 年度は 3 回実施し、参加者は延べ 8 名だった。勉強会の内容は介護保険について、緊急時の対応について(消防への通報等)についてで、長く日本に住んでいても言語の壁により情報へのアクセスが限られることがわかった。参加対象は HIV 陽性者に限定しない形で開催することを決め、広く参加者を集うため対面とオンラインのハイブリッドで開催している。2024 年度はこれまで CHARM と関わりのなかった人たちへも広めていく予定で、開催時は参加者の意見を聞いて調整する。

4-4) つむぐ

活動開始：2023 年 6 月開始

活動の主旨：さまざまな不安を抱える高齢 HIV 陽性者の方々が集まって、共に語り合うことで老いることへのそれぞれの不安を言葉化する機会を提供し、相互援助のつながりを築く。

メンバー：3 名(看護師 1 名 保健師 1 名 ボランティア 1 名)

活動頻度：2 カ月に 1 回 第 4 火曜日 14:00-15:00 1 時間

場所：CHARM 事務所

会議開催頻度：開催後次月 第 4 火曜日 13：00-14：00

対面会議にて実施

2023 年 6 月から 2 ヶ月に 1 回、合計 5 回実施した。参加者は、中高齢者、独居、そして HIV/AIDS 以外にも疾患を抱えている方々である。参加者は、介護支援を受けておられるため、その都度訪問看護師やケアマネージャーとも情報を共有し連携を取っている。

「つむぐ」の場で話し合われることは、今後身体的・精神的にどうなっていくのか、緊急時に誰に連絡をするのか、またその方法について、終焉後のことなども含まれる。そして問題によっては出来る方法を教え合い皆で考える。否定せずに個々が思いを伝え、様々な不安を一人で考えずに皆で話し合う場でもある。話し合いのテーマは意義を見つけることが出来るように、話の中から担当者が決定している。時には「クリスマス会」や「桜を見る会」などを開いて皆で楽しむ。中には皆さんと会って話をするととても楽しかったと訪看担当者に電話で報告が入ることもあった。個々の QOL の向上に向けて継続していく。

5) 多言語支援

5-1) HIV と結核の通訳派遣事業

活動開始：2002 年

活動目的：日本語以外の言語を背景とする人が、医療機関、保健所などで自分が理解できる言語で安心して診察を受けるために医療通訳を実施する。

活動内容：

1) HIV 通訳

内容：HIV 陽性者の診療時、行政窓口やその他の手続きの際の通訳（同行、電話、遠隔映像）

委託元：厚生労働省

2) HIV 検査時通訳

内容：自治体、NGO 等が行う HIV 検査、結果返しの際の通訳(対面、遠隔映像)

委託元：京都市、MASH 大阪、スマートらいふネット、大阪市、大阪府、杏林大学

3) 結核通訳

内容：結核感染者の受診、接触者検診、DOTS 指導、濃厚接触者等に関する聞き取りの際の保健師と患者の間の通訳(対面、遠隔映像)、資料翻訳

委託元：大阪府、大阪市、堺市、八尾市、寝屋川市、枚方市、吹田市、高槻市、京都市

4) 契約以外の通訳

内容：医療機関での結核/デング熱、医療者へのインタビュー

5) 医療通訳研修

内容：登録通訳の知識更新のため、また新規の通訳者採用前の基礎知識習得のために実施

委託元：杏林大学

登録通訳者：78 名 (15 言語)

5-1-1) HIV 医療通訳事業

2023 年度の通訳実施件数は 299 件で、昨年より大きく増加した。(2022 年度 187 件、2021 年度 119 件、2020 年度 108 件、2019 年度 97 件) 通訳形式については、同席通訳が 238 件、遠隔映像通訳が 39 件、電話通訳が 22 件であった。遠方の医療機関からも継続して依頼があり、昨年度の遠隔映像通訳は 18 件、

電話通訳は 17 件から増加している。2022 年度に続き、移住 HIV 陽性者への情報提供とフォローアップ(上記 3-1)および 3-2)により支援した人の多くが医療通訳を希望したこと、その他 HIV 検査会場での通訳から、結果が陽性となった方の受診時通訳につながったケースが、ベトナム語、フィリピン語、ミャンマー語など複数件あったことなどが件数増加の要因と考えられる。

通訳は 19 の国や地域出身者に対して、言語は英語 101 件(34%)、中国語 76 件(25%)、ミャンマー語 44 件(15%)など 11 言語で対応した。新しく LINE 公式アカウントを持ち、利用者と通訳者、事務局の間の連絡が敏速に行えるようにした。また、年度途中より HIV 陽性者支援担当者と月 1 回のケース会議を持ち、問題の発生を予防し、よりきめ細かく対応できる体制を整えた。感染症科以外の科の通訳実施は、心臓や脳の外科手術や、精神科、梅毒治療などであった。新規のケースは 33 件、子どもを含めた 2 組の家族が含まれる。

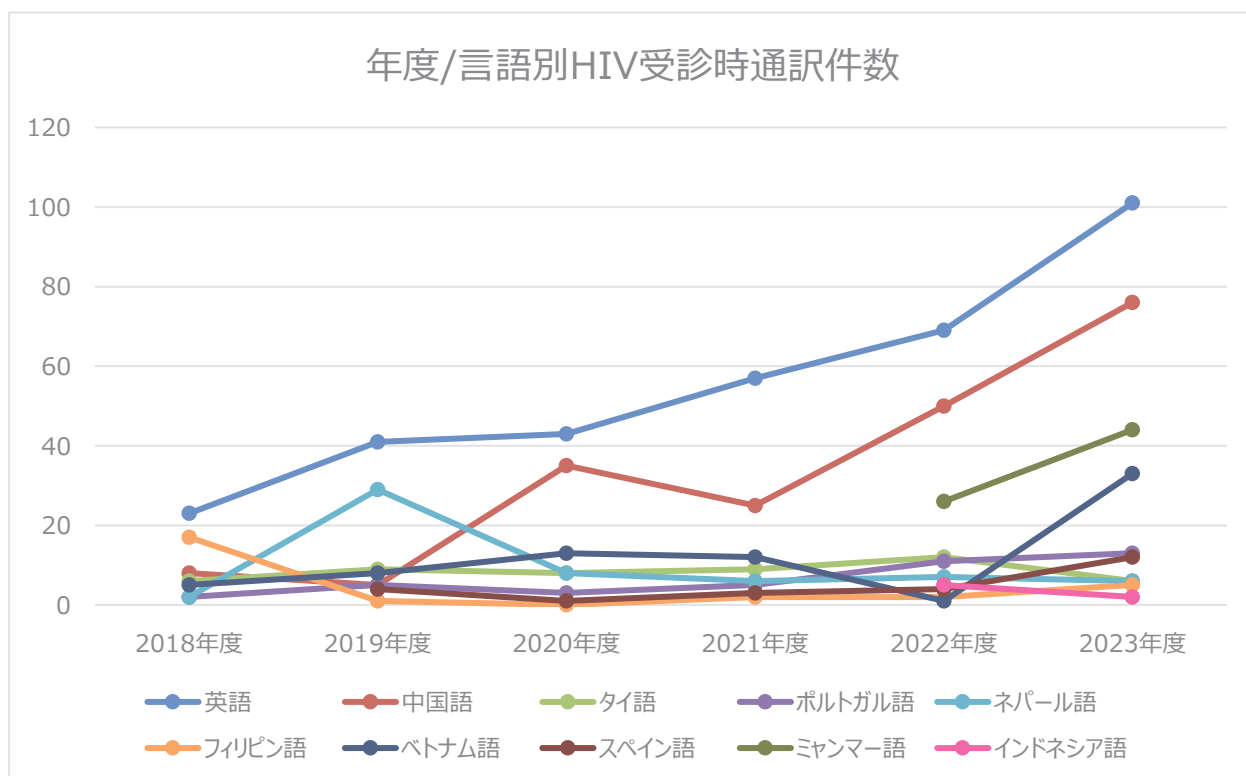
通訳実施が最も多かった大阪医療センターでは 31 名の利用者に対し、延べ 145 回の通訳を実施した。次に多かった大阪市立総合医療センターでは、9 名の利用者に対応し、延べ 31 回の通訳を実施した。信州大学医学部付属病院では遠隔映像通訳を 20 回、北海道大学病院は電話通訳を 10 回実施した。合計 25 の医療機関で通訳を実施し、昨年度の 14 医療機関から大幅に増加した。区役所、年金事務所、福祉事務所など行政機関への同行は、医療機関受診後に行ったものも含めると 10 件である。

1.医療通訳実施回数：299 回

2.対応言語：英語、中国語、ベトナム語、フィリピン語、タイ語、ネパール語、ポルトガル語、スペイン語、インドネシア語、ミャンマー語、マレー語

2023 年度 HIV 関連の医療通訳実績(件数)

		英語	中国語	スペイン語	ポルトガル語	ベトナム語	ネパール語	フィリピン語	タイ語	インドネシア語	ミャンマー語	マレー語	合計
HIV 診療	大阪医療センター	56	30	11	4	18	0	2	0	0	24	0	145
	大阪市立総合医療センター	19	11	0	0	0	0	0	0	0	0	1	31
	信州大学医学部付属病院 (Zoom)	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
	京都医療センター	0	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0	14
	北海道大学病院(電話)	0	0	0	0	0		0	4	0	6	0	10
	木内レディースクリニック	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	兵庫医科大学病院	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	都立駒込病院(Zoom)	0	4	0	0	0	0	0	0	0	3	0	7
	その他の医療機関	6	9	1	9	1	6	3	1	0	11	0	47
行政 機関	区役所、年金事務所 福祉事務所	6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	7
その他	自宅	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	合計	101	76	12	13	33	6	6	5	2	44	1	299



5-1-2) HIV 検査通訳事業

① 京都市夜間検査

2023 年度は昨年度に続き、京都工場保健会へ英語通訳者を派遣した。24 回全ての検査に予約が入り、延べ 46 人の通訳を行った。うち 1 名は来場後コロナ感染がわかり、検査は実施されなかった。1 名が陽性となり、受診時の通訳派遣につながった。期間中、1 回の検査の予約枠が 2 名であるため、予約が受けられないことが何度もあり、大阪の検査会場や有償の医療機関を紹介するケースも生じた。多言語対応の HIV 検査枠の増設について京都市に交渉を行ない次年度は枠が増える見込みである。

② dista でピタッとちえつく

MASH 大阪が実施しているコミュニティセンターdista でのゲイ・バイセクシュアル向けの HIV 検査において zoom を使った遠隔映像通訳を行うために英語、中国語の通訳者が各 6 回待機し、英語通訳を 3 回、中国語通訳を 1 回実施した。検査後の結果返却時には同席で英語を 3 回、中国語を 1 回実施した。同検査会場では広報の努力にも関わらず受検者数が伸びず、今後の日程調整などの課題が残った。

③ chotCAST HIV 検査会場

2023 年度より主催は大阪府/大阪市となり、月 1 回の通訳付検査時に中国語、英語、ベトナム語の通訳を行った。検査時は全て同席通訳となり、中国語は毎月、英語とベトナム語は隔月に通訳者が会場で待機した。検査時通訳実施は英語 12 件、中国語 9 件、ベトナム語 7 件、合計 28 件実施した。このほか、陽性告知時の通訳を中国語 2 件、ベトナム語 2 件、インドネシア語とミャンマー語各 1 件、合計 6 件実施した。そのうちの複数件が受診後の通訳実施につながっている。

④ 杏林大学 HIV 検査

2023 年度からの事業である。下記 5-1-5)医療通訳者研修から派生した事業で、厚生労働省の研究事業¹⁾の一環である。検査イベントや、自治体の HIV 検査時の遠隔映像通訳を実施した。イベント検査としては東京都、埼玉県、沖縄県の 6 会場で 13 回待機、英語 8 件、中国語 7 件、ベトナム語 2 件、合計 17 件の通訳を実施した。うち 1 件が要確認検査となり、要確認検査時の通訳を別の施設で 1 件実施した。予約が入らずキャン

セルとなったのが上記の言語にインドネシア語とポルトガル語を含めて延べ 13 通訳者。イベント検査では 2023 年度も PrEP に関する質問が目立った。

7 自治体保健所での HIV 検査時または結果返却時に、英語 5 回、ベトナム語 4 回、ポルトガル語 1 回、通訳者が遠隔 zoom で待機した。英語 3 件、ベトナム語 2 件の通訳を実施した。予約時に通訳必要言語の確認や、通訳介入の承諾を得ることがむずかしく、年度途中で複数言語で言語を確認し、介入承諾を得るための書類を配布し、体制を整えていった。他団体や、CHARM への相談者の希望などもこの事業に結び付いた。

⑤ 大阪市保健所が実施している HIV 検査実施後の陽性告知時の通訳派遣は残念ながら依頼がなかった。

⑥ 大阪府保健所から受託事業として、医療機関で HIV 陽性が判明した際の告知時に医療通訳を期間限定で派遣することになっていたが、こちらも残念ながら利用者はなかった。

2023 年度 HIV 検査時医療通訳実績(件数)

	検査/結果返し場所	英語	中国語	ベトナム語	インドネシア語	ミャンマー語
HIV 検査	京都工場保健会	46	-	-		
	dista/結果返し会場	6	2	-		
	chotCAST	12	11	9	1	1
	杏林大学イベント検査	8	7	2	-	-
	杏林大学保健所検査	3	-	2	-	-
	HIV 検査関連通訳実施合計	75	20	13	1	1

(合計 110 件)

5-1-3) 結核通訳事業

2023 年度の結核通訳は 5 つの自治体から計 121 件(2022 年度 104 件、2021 年度 48 件)の依頼があり実施した。実施件数の中で多かったのは大阪市が 88 件(73%)、大阪府が 23 件(19%)であった。

結核治療のために入院中の患者に対して、結核治療の理解の確認と今後の保健師の支援計画についての説明、患者や家族への聞き取り調査や接触者検診、日本語学校、自宅、職場での DOTS 指導など時の通訳を行った。また、患者の体調不良、コロナ感染、治療の継続拒否などの理由で、保健所からは通訳の依頼がありながら実施できなかったケースが 8 件あった。今年度は合計 7 つの日本語学校でも通訳を実施したが、そのうち 1 校では濃厚接触者や感染者のために、学校だけではなく医療機関にも通訳を派遣した。このように学内で感染者が多く出たことにより、7 月の通訳実施数は 21 件にのぼった。

大阪市通訳実施先別リスト

依頼先	通訳実施先	英語	中国語	フィリピン語	ネパール語	ベトナム語	ミャンマー語	ポルトガル語	インドネシア語	韓国語
大阪市	生野区保健福祉センター		1				2			
	北区保健福祉センター					1				
	此花区保健福祉センター				1					

	城東区保健福祉センター				7					
	浪速区保健福祉センター					2	1			
	西区保健福祉センター					1	2			
	西成区保健福祉センター	1	2	3			1			
	西成区保健福祉センター分館		1				1			
	西淀川区保健福祉センター					1	1			
	東住吉区保健福祉センター	1								
	東成区保健福祉センター			1					7	
	東淀川区保健福祉センター			1						
	福島区保健福祉センター		1						1	
	淀川区保健福祉センター				4					
	大阪市保健所					2				
	近畿中央呼吸器センター			2	3		1			1
	大阪複十字病院								3	
	阪奈病院				4	2			2	
	大阪社会医療センター					2	1			
	やまざきクリニック				3					
	その他の医療機関	1				2	2		1	1
	日本語学校				3	1	5		1	
	患者自宅									
	職場									
	合計	3	5	7	25	14	17	0	15	2

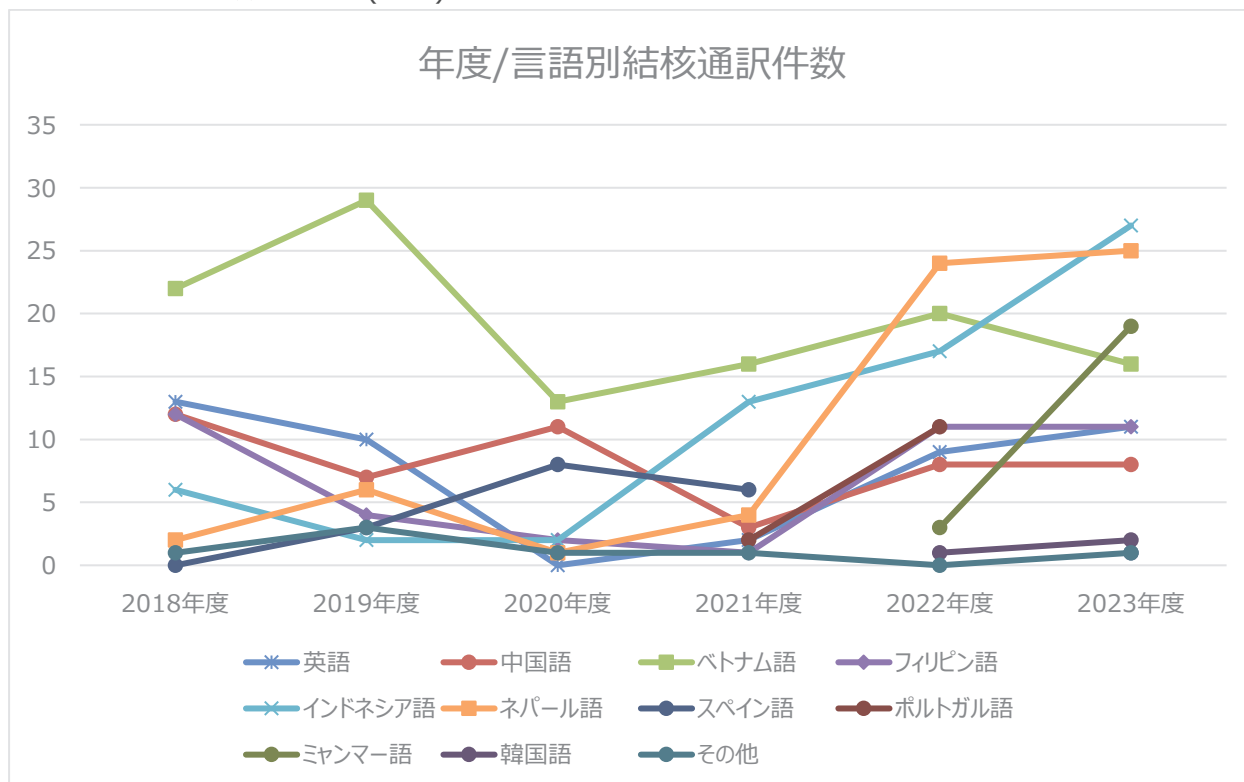
(合計 88 件)

大阪府内通訳実施先別リスト

依頼先	通訳実施先	英語	中国語	フィリピン語	ベトナム語	ミャンマー語	インドネシア語	クメール語	スペイン語
大阪府	四條畷保健所						1		
	大阪はびきの医療センター	2	3		2	2	3		
	大阪複十字病院						2		
	市立池田病院						2		
	りんくう総合医療センター						1		
	患者職場	2							
	患者自宅			2			1		
堺市	近畿中央呼吸器センター	4					2		
枚方市	関西医大付属病院								1
八尾市	八尾市保健所(同席/遠隔映像)			1				1	
	大阪はびきの医療センター			1					
	合計	8	3	4	2	2	12	1	1

(合計 33 件)

2023 年度結核通訳派遣実績(件数)



5-1-4) 契約以外の感染症の通訳

2023 年度は、大阪総合医療センターで継続的な支援を要する患者への多言語支援として、結核感染者、デング熱感染者の 2 名にミャンマー語で計 10 回の通訳支援をおこなった。

5-1-5) 医療通訳者研修

HIV／結核通訳研修の通訳養成講座を開催し、4 日間の通訳研修を行なった。

2023 年度の医療通訳研修も、2019 年度から続いて杏林大学北島勉氏を代表とする研究事業¹⁾の一環として実施した。

研修日程：1) 9 月 2 日 9:00-14:00 2) 10 月 14 日 9:45-13:40
 3) 12 月 16 日 9:45-12:00 4) 2024 年 1 月 13 日 9:00-13:00

目的：新しい医療通訳者の養成、すでに登録している通訳者の知識と技術の向上

言語別研修参加者：英語 15 人、英語/ベトナム語 1 人、タガログ語/英語 1 人、ネパール語/英語 1 人
 中国語 3 人、韓国朝鮮語 1 人、ミャンマー語 1 人、延べ 58 人

研修後 2 名が通訳者として新規登録した。今後も登録作業を継続していく予定。

研修形態：zoom による遠隔研修

☆オンライン研修内容

1. 結核に関わる基礎研修：井村元気(大阪市保健所)、森本哲生(大阪市保健所)
2. 通訳倫理：岩田美加(元大阪はびきの医療センター手話通訳者兼言語通訳コーディネーター)
3. 通訳技能について：宮首弘子(杏林大学)
4. 言語別通訳技能に関するグループワーク(英語 3 グループ、中国語/韓国語+ミャンマー語グループ各 1)
5. ネパール語、フィリピン語研修(HIV 検査)、それ以外の言語の希望者と CHARM スタッフの質疑応答
6. 英語、中国語ロールプレイ(HIV 検査場面)、それ以外の言語は見学。



☆視聴研修内容

「HIV の基礎知識」白野倫徳(大阪市立総合医療センター感染症内科医師)

「感染症に関わる社会保障制度と外国籍住民」青木理恵子(NPO 法人チャーム事務局長)

「通訳者のための PrEP 入門」生島嗣(NPO 法人ぐれいす東京代表)

脚注 ¹⁾ 厚生労働省在留外国人に対する HIV 検査や医療提供の体制構築に資する研究班・研究事業、研究代表杏林大学総合政策学部教授北島勉

5-2) 翻訳

病院や行政機関などから HIV や結核などに関連する資料の翻訳などの依頼があり対応した。

実施した翻訳内容は下記の通りである。

依頼元	内容	言語
兵庫医科大学病院	ベトナム語の紹介状	ベトナム語→日本語
札幌医科大学附属病院	コミュニケーションに関する質問用紙	日本語→タイ語
HIV 検査会場(大阪)	検査前説明看板、資料	日本語→中国語、英語、ベトナム語
陽性者支援事業	相談者への対応	・日本語↔タイ語 ・中国語→日本語
コミュニティセンター dista	団体パンフレットの多言語	日本語→英語、中国語(簡体字、繁体字)、ベトナム語、ポルトガル語
通訳事業(杏林大学予算)	・研修ロールプレイ台本 ・通訳依頼用紙	・日本語→タガログ語、ネパール語、英語 ・日本語→ミャンマー語、インドネシア語、ネパール語
自治体(大阪市)	外国籍住民向け結核啓発リーフレット	日本語→英語、中国語、韓国語、タガログ語、ベトナム語、インドネシア語、ネパール語、ミャンマー語
自治体(大阪府)	大阪府下検査情報(翻訳のネイティブチェック)	日本語→中国語、ベトナム語、英語

6) 関西学院大学留学生支援事業

活動開始年：2023 年

活動目的：交換留学生が日本で健康に勉学に取り組むため、学外での支援の一助となる。

活動内容：1) 大学保健館における学校医との面談時通訳 2) 病院同行/通訳 3) 授業に出来ない学生の安否確認 4) 障害を持つ学生の役所への手続き同行/通訳

開催頻度：必要に応じて随時

委託元：関西学院大学

2023 年 4 月より新規事業として兵庫県西宮市の関西学院大学からの委託事業を開始した。関西学院大学では毎年約 300 名の交換留学生を各国から受け入れているが、中には精神疾患や発達障害、難病を抱えながら学ぶ学生もいる。学生たちは大学生活を円滑に進めるために、大学内の留学生担当事務所や保健館からのサポートを受けている。大学外の医療機関を受診する必要があると、医療者や事務スタッフとの間の意思疎通が問題となることがあるため、学外の医療機関を受診する際、同行通訳を行う。初年度の 2023 年度は精神疾患、発達障害の学生をメインに支援していく予定だったが、急な発病やケガなどで医療機関へ受診する学生の対応もした。2023 年度の対応件数は延べ 112 回(32 名)である。同行先としては、内科、整形外科、婦人科、皮膚科、耳鼻咽喉科、精神科、ペインクリニックなどの多岐に渡る診療科へ通訳・同行支援を実施した。今年度は授業に出来ない学生の安否確認を行うことは無かった。

7) ネットワーク

2023 年度に行なった他団体とのネットワーク構築の最大のものは、12 月に行われた第 37 回エイズ学会学術集会の市民フォーラムを関西の団体に呼びかけて共同で行なったことである。



日本の HIV の歴史は薬害エイズから始まっている。現在、HIV 診療を支えている医療制度も薬害裁判の際に行われた国と薬害エイズ裁判原告(東京、大阪)との和解協議が生み出した。多剤併用療法が開始される前の時代に 1 剤治療しかなく、自らの生命を救うことはできなかったが、次に続く人々のために行動した結果できた現在の医療制度である。この歴史の理解が、時代と共に薄れていることを私たちは危機的に捉えていた。風化する前に次

の世代が HIV の歴史を実感する機会を作らなければ。そこで始まったことが日本の HIV の歴史 40 年の年表作りである。この作業は、薬害エイズ被害者とその家族を支える MARS、ゲイとバイセクシュアルのためのコミュニティセンターの Mash 大阪 dista、CHARM の三者が中心となって行なった。

HIV の年表は UNAIDS を始め、ピーター・ピヨット氏、エイズアンドソサエティの宮田一雄さん、そして各市民団体がそれぞれ作成していた年表を合体し、世界の動き、日本の動き、薬の開発、市民団体の誕生、公開された映画などを軸として 40 年を振り返る資料とした。作成事務局は MASH 大阪が担い、作者によって年号が違うものを調べるために多大な苦勞をして模造紙横 10 枚分の年表にまとめた。年表は、貸出可能である。2004 年秋には MASH 大阪 dista のホームページで閲覧できる予定である。

同学会市民フォーラムは、開催までに半年ミーティングを積み重ね、協力団体を呼びかけ、関西・北陸の 10 の団体が参加した。フォーラム当日の 12 月 3 日(日曜日)午後 3 時から 9 時という限られた時間であったが、会場となった龍谷大学響都ホールでは、「メモリアル」「ドキュメント」「アクション」をテーマに歴史と人との出会いを通して人とつながるために、メモリアルキルトの展示や 94 歳のゲイ男性による自作の歌の披露、30 年前のエイズを描いた劇 S/N の録画上映などの企画が行われた。この場に参加した人は身体で歴史を感じたことと思う。半年間の共同作業を通して、このネットワークから CHARM の活動に参加する人が増えた。これからも共同事業などできる協力をしていくことにつながれば幸いである。

8) 広報

8-1) 10 言語ホームページ、SNS での情報発信

ホームページにて継続的に実施予定のイベントや関西圏内や全国での外国語対応する検査情報などの発信を行った。2023 年度のホームページの閲覧数の年間平均は 13,900/月に増加した(2022 年度 11,000/月)。

情報発信に関して、大きな変更は下半期にホームページのリニューアルを行ったことである。

近年、CHARM のホームページを閲覧する方の多くは、スマートフォンなどのモバイル端末を使用している。モバイル端末からのアクセスが、2023 年度は 8 割以上であり(2022 年度 7 割以上)、これからも増加の傾向にある。これまでの CHARM のホームページは、スマートフォンなどの小さい画面に十分に対応できていなかった。今年度はスマートフォンから検索する利用者にも見やすいようなテーマ変更を実施し、そして情報にアクセスしやすいように構成を見直した。



また、以前は、全ての情報を日本語および 9 つの多言語で提供してきたが、日本国内で生活し治療を受けて支援を求める HIV 陽性者と、これから来日する外国人陽性者が求める情報や支援が異なるため、それぞれが求める情報を分けて提供した方が、利用者にとって情報が分かりやすくなると考え、今回の改訂で日本語とそれ以外の

言語のコンテンツを独立させた。

リニューアル作業の中、検索エンジン最適化(SEO)を意識しながら、日本語コンテンツを大幅に改訂した。なお、多言語のコンテンツの改訂は 2024 年度に行う予定をしている。

その他、ホームページで情報提供している内容が行き届くように Facebook や X(旧 Twitter)などの SNS を活用した。

8-2) ホームページを通じた相談

2023 年度は CHARM のホームページのフォームを利用した問い合わせ件数は 123 件であった。その中、日本語以外を話す方からの問い合わせで、HIV に関連するものが 86 件あり全体の 70%を占め、昨年度より増加した。(2022 年度 76 件)

問い合わせの内訳は日本における医療制度・HIV 診療・医療機関が 72 件、来日する前の方からの HIV 陽性者の日本での生活、仕事について 13 件、HIV 検査情報が 12 件、言語支援 3 件、感染症不安 1 件、海外ネットワーク情報 1 件、プログラム参加希望 1 件、その他の事務局への連絡などが 20 件だった。

問い合わせで使用された言語は英語が最も多く 58 件、外国人からの日本語による問い合わせ 15 件、日本語 14 件、インドネシア語 13 件、ポルトガル語 9 件、中国語 5 件、スペイン語 4 件、タイ語 4 件、タガログ語 1 件だった。

問い合わせのアクセス元は国内から 57 件 (内外国人から 43 件)、海外から 57 件(2022 年度 26 件)、不明 9 件だった。海外からの問い合わせが 2 倍以上増加した。

2024 年度に、来日前で海外からアクセスして来る外国人 HIV 陽性者に提供する情報を充実していく予定である。

8-3) CHARM からの情報発信

CHARM の機関紙である「Charming Times」の発行を年 2 回行った(設立 20 周年特別号として 24 号、25 号)。団体の機関紙は、一般に公開し、誰でも、どんな端末からでも閲覧しやすいように HP に文章、写真、イラストなどを使い、読みやすいように工夫した。一方、PDF 版もホームページからダウンロードできるようにした。紙媒体を希望する方やインターネットにアクセスがむずかしい方に配布できるように印刷物も作成した。

2023年 11月発行 / 24th Edition	
CharmingTimes	
特定非営利活動法人CHARM Center for Health and Rights of Migrants	
目次 Index	
特集A	20周年記念事業／20周年記念パーティー実施報告 2
特別企画①	CHARMの紹介 6
特集B	CHARM設立20周年「私とHIV」(3/4) 松浦基夫 8
CHARM活動レポート	多文化キャンプ／日本エイズ学会学術集会 10
HIVと人々	外国人のためのCHARM 12
特別企画②	ちょう個人的！すきやねん大阪 13
NETWORK	そらにじりめじ訪問記 14
事務局から	2023年会員総会報告／20周年募金(2年目)経過報告 15

CHARMは「すべての人が健康(すこやか)に過ごせる社会」を目指して、日本に
くらす外国人住民も医療/福祉にアクセスできる環境を地域の人々や他機関と
ともに創っています。またHIVと共に生きる人々を多言語で支援しています。

CHARM is "building a healthier society for all" through network with organizations
and individuals to create environment where medical and welfare services are
accessible to foreign residents. CHARM also provides multi-language support for
people living with HIV.

www.charmjapan.com

フルバージョンはCHARM ホームページまで！
www.charmjapan.com

2024年 3月発行 / 25th Edition	
CharmingTimes	
特定非営利活動法人CHARM Center for Health and Rights of Migrants	
目次 Index	
特集A	20周年記念事業／国内フォーラム実施報告 2
	記念事業から次のステージへの展開 4
特別企画①	CHARMの紹介 6
特集B	CHARM設立20周年「私とHIV」(4/4) 松浦基夫 8
CHARM活動レポート	「市民フォーラムでの《S/N》との出会い」/ 2023年度通訳研修／関西学院大学 留学生支援事業 10
HIVと人々	櫻本てる子さん 12
特別企画②	ちょう個人的！すきやねん大阪 13
NETWORK	ロカボ食べながらHIVを知る会 14
事務局から	2024年会員総会ご案内 など 15

CHARMは「すべての人が健康(すこやか)に過ごせる社会」を目指して、日本に
くらす外国人住民も医療/福祉にアクセスできる環境を地域の人々や他機関と
ともに創っています。またHIVと共に生きる人々を多言語で支援しています。

CHARM is "building a healthier society for all" through network with organizations
and individuals to create environment where medical and welfare services are
accessible to foreign residents. CHARM also provides multi-language support for
people living with HIV.

www.charmjapan.com

フルバージョンはCHARM ホームページまで！
www.charmjapan.com

CHARMに関わるすべての人を「CHARMER」と呼び、事業やイベントの案内を「charmer ML」として2023年度も毎月配信を行った。毎月配信されるニュースを受け取り、その時に動いている活動について情報を得ることができると好評であった。配信を受け取る charmer は、CHARM 会員、サポーター(賛助員)、活動メンバー、スタッフ、理事である。

9) 実習・研修受け入れ



日時	主催機関・対象者	実施内容	参加者数
6月13日	大手前大学大学院国際看護研究科 助産実践科学分野	外国人母子医療について	3名
7月24日 - 28日	大手前大学国際看護学部	夏季実習 地域支援を学ぶ	6名
10月16日	大阪医療センター	HIV 感染症実施研修 NPO/NGO 施設訪問と講義	4名
10月26日	大阪市立総合医療センター	訪問看護師への研修	3名

10) 理事会

理事長	松浦基夫
副理事長	武田丈
理事	中萩エルザ、白野倫徳、福村和美、川名奈央子、エレーラ・ルルデス・ロザリオ
監事	三保俊幸

今年度は3回の会議を開催して協議検討を行った。

・第1回理事会 CHARM 事務所およびオンライン配信

日時：2023年5月15日(日)10:00-12:00 参加 理事7名、監事1名、欠席：1名、

- 議事：1) 20周年記念事業2年目の計画と担当理事・・・承認
2) 2023年CHARM会員総会の準備と役割分担・・・承認
3) 認定NPO法人資格取得の方向性・・・承認

・第2回理事会 CHARM 事務所およびオンライン配信

日程：2023年11月18日(土) 15:00-17:00 参加 理事6名、監事1名、欠席：1名

- 議事：1) 20周年記念事業の評価 より広い範囲の人たちがCHARMに関わる機会となった・・・承認
2) 20周年記念募金 寄付金の増加 大口寄附200万円 幼きイエスの会より・・・承認
3) 20周年記念事業最終プログラム内容、日程、時間、会場の検討・・・承認
4) 3人をサポーター（賛助員）から正会員への移行・・・承認
5) 2024年CHARM会員総会
日程：2024年6月1日(土) 14:00-16:30
会場：在日大韓キリスト教会大阪北部教会
プログラム詳細：次回理事会で決定

・第3回理事会 CHARM 事務所及びオンライン

日時：2024年3月25日(月) 19:00-20:30 参加 理事6名、監事1名、欠席1名

- 議事：1) 2023年度 年度末決算見込み・・・承認
2) 20周年記念事業は全て終了。事業の評価・・・承認
① 正会員、サポーター、法人会員、全て増加 2023年11月と比較して2024年3月は会員20人増加
② 古いメンバーの復帰 元理事、元職員、修了したプログラムのメンバーなど
③ 記念事業最終プログラム 国内フォーラム「海外から移住するHIV陽性者の現実(リアル)」には直接参加とオンライン参加合わせて53名が参加。その後の交流会に20名余りが参加した。
3) 2024年会員総会、CHARM集会のプログラム内容・・・承認
4) CHARMのこれから20年を切り開くための体制整備
① 事務局スタッフの職責移行 事務局長の役割の分散化・・・承認
② 事務局スタッフ人件費確保のための助成金申請、委託事業開拓、勤務年数による人件費基準の制定・・・承認
③ 委託事業以外に財源を確保する方法を検討し始める・・・承認
④ 事務所移転を検討開始 耐震構造、駅からのアクセス、バリアフリーを条件に探す・・・承認
⑤ 認定NPO法人資格取得 2024年度内に実施の方向・・・承認
5) 事務局スタッフに対して年度末に一時金を支給・・・承認

11) 会員総会

日時：2023 年 6 月 17 日(土) 14:00-17:00

手段：現地参加とオンライン開催

会場：在日大韓基督教会大阪北部教会

出席：現地参加 30 名、リモート参加 34 名 (内傍聴 14 名)

正会員 41 名のうち現地 16 名出席 委任状 12 名 合計 28 名 正会員過半数をもって総会成立



I. 議事：2022 年度の事業報告及び活動決算について・・・承認

2023 年度の事業計画案及び活動予算案について・・・承認

II. CHARM20 周年記念事業について事業担当理事が報告を行った。

2022 年 11 月 23 日に開催された設立 20 周年記念事業「Asian Forum on HIV and Migration/移民と HIV に関するアジアフォーラム」の実施報告、HIV 年表作り、2023 年度計画の 20 周年記念パーティーの開催が案内され、今後認定 NPO を申請することが承認された。

Ⅲ. パネルディスカッション：「マイノリティが健康に暮らすために NGO が果たしてきた役割」

パネリスト：鬼塚哲郎(男性同性愛者コミュニティ)、エレラ・ルルデス(外国人コミュニティ)、川名奈央子(女性陽性者コミュニティ)

IV. 交流会 会員によるインド本場仕込みのチャイ、CHARM がホームページで 10 言語の情報を提供していることにちなんだ 10 カ国の茶菓子を準備した。

12) 事務局

青木理恵子 (事務局長、理事会、渉外)

庵原典子 (通訳派遣、通訳研修)

ブラーボンキワラシ (広報、外国語によるエイズ電話相談)

オンバダ香織 (女性交流会)

前田圭子 (総務、会員)

宮本珠美 (会計、総務)

三田洋子 (エイズ専門相談、そよかぜ、HIV 総合相談窓口 SO SO SO、つむぐ、医療従事者実習受け入れ)

竹野翠 (交換留学生医療・生活支援、外国人陽性者支援、JSS)

13) 会員

会員数 141 名 (前年比 +29 名)

〈内訳〉

サポーター (賛助 A) 45 名

サポーター (賛助 B) 49 名

正会員 43 名

法人・団体サポーター 4 (21 口)

14) 寄付者名一覧(敬称略)

○ 一般寄付 個人

青木理恵子、荒巻富美、安間てう子、市川典子、岩元美和子、宇野健司、大久保絹、奥野有佳、
織田幸子、小田美乃里、小野康子、柏崎正雄、来住知美、金香百合、小林愛子 Gray、汐碓直美、
白野倫徳、関祥子、田島望、谷口裕子、田守敏樹、張善花、豊島裕子、成田康子、西岡麻祐子、
狭間明日実、前田佳壽美、松浦洋栄、松浦基夫、松岡綾子、宮本愛梨沙、宮本久子、山口和子、
山口樹子、山中京子、山本いづみ、米本キャサリン、LIU JIAYOU、リンパヤラヤ スプレーニー、
匿名 3 人

○ 一般寄付 団体

幼きイエス会、

日本基督教団池田五月山教会

日本基督教団大正めぐみ教会

○ 20 周年記念寄付 個人

荒巻富美、石川敏夫、今井由三代、今村葉子、岩元美和子、植地直也、植田恵美、逢坂隆子、
上内鏡子、軽込郁、小泉世津子、児玉菊雄、佐藤修郎、白野倫徳、鈴木雅子、関祥子、岳中美江、
豊島裕子、新倉久乃、林律、松野周治、八尾勝、八木路子、LIU JIAYOU、Lew King Foong

○ 20 周年記念寄付 団体

一般社団法人ぶろっさむ

日本キリスト教団京都上賀茂教会